

Os Lusíadas (訳第4回)

小林英夫・池上岑夫・松尾多希子

第 2 歌

1

このときすでに、一日の時刻を
きざみつつある明るい惑星は
おもむろに終点に達していた、
御空の光を人にさえぎりつつ。
すると海原のかくれがの扉を
夜の神がひらいてやった。おりしも
不実のやからは投錨したでの
大船めがけて漕ぎつけてきた。

2

なかのひとりで、致命の計略を
引き受けたものが言うのであった：
—「ネプトゥーヌスの領地と汐路を
きりひらかれた勇敢な提督よ、
この島の王は貴下のご到来を
いたく悦ばれ、なにはともあれ
宿を提供し、お近付きをねがい、
物資を補給させていただきたい。

3

そして天下に名の知れた貴下の
拝眉の栄をぜひにも得たいとて、
乞うております、なにもご懸念なく
艦隊もろとも入港されるよう。
それに海路はるばるの難儀ゆえに
乗組員も疲労のことであろう、
上陸して休養なされたい。
地を踏みたいは人情の自然。

4

もしまた黄金充つる近東に
産する品々を探してゆかれるなら、
肉桂、丁字、舌やく香辛料、

さては靈験いやちこの薬石を、
またもし光かがやく宝石類、
みごとなルビー、かたいダイヤがお好きなら、
それで望みに切りがつけられるほど
すべて当地でお手に入れられましょう。

5

この王のことばに感謝しつつ
提督は使者に答えていった、
ご芳志はありがたいが、陽が海に
没したので入港はいたしますまい。
もっとも月かげさして艦隊の
ゆくてに危険がないと知れたら
ためらわず王命にしたがいましょう、
大人へのせめてもの謝意ですから。

6

なおそのあと使者に尋ねた、当地には
按針のいうようにキリシタンがおるか。
悪だくみにたんのうな使者はいった、
住民のおおかたはキリストを信じていると。
こんなぐあいにして提督の胸から
いっさいの疑団を払いのけてしまった。
かくして提督はなんのわだかまりもなく
不信のともがらを信じてしまったのだ。

7

かれは罪またははれんちのかどにより
罰せられたものを数名つけていたが、
それはこうしたいかがわしいばあいに
役立てようためであったが、そのうち
機敏な海千ものをふたり送った、
モーロの都市と力を視察させ、
また会いたくてならぬキリシタンに
はたして会えるかどうかを見るために。

8

またかれらに託して王に贈り物をした、
先方のしめした好意を確実に
誠実で丁重なものとするようにと。
あにはからんやそれは裏腹であった。
すでに信用のおけぬ悪党どもは
船を去って海を切り進んでいた。
船団のふたりは陸地であって
いつもの歓迎をうけていた。

9

ふたりは提督の伝言とともに
持参の贈り物を王にささげたあと
都市内をあちこち見てまわったが
収獲は期待にはほどとおかった。
それというのも慎重なモーロが
おいそれと見せるのを控えたからだ。
なぜなら悪意の領するところでは
ひとを見たら泥棒とおもえ、だから。

10

ところでかわらぬ容貌のうち
ときわの青春を保ちながら
ふたりの母から生まれた神は
船乗りを無きものにしようとして
計をかまえ、市内のとある家で、
人間の顔をし、にせ服をまとい、
キリシタンに見せかけ、すごく豪華な
祭壇をつくって礼拝していた。

11

そこにはいと高き精霊の絵が
肖像としてかたどられていた。
白い小鳩が唯一の不死鳥
きよき聖母の上に描かれていた。
十あまりふたりの聖なる仲間が
画かれていたが、とまどうた様子、
落ちくる唇の舌によってのみ
さまざまの言葉を語る人のように。

12

こんな偽購に余念ないバッカスの
もとへ案内されたふたりのものは
地にひざまづき、世を治めたもう
神さまのほうへと心をむけた。
かくわしいバンカイアに産する
みごとな香をティオネの息子は
たいた、こんなぐあいには、とどのつまり
にせ神がまことの神をおがんだのだ。

13

その夜のふたりのキリスト教徒は
丁重きわまるもてなしをもって
泊めてもらった、信心のよそおいに
たぶらかされたとは夢にも思わず。
しかしながら太陽の光線が
世界にまきちらされ、くれないの
水平線にティトノスの情人の
あかいひたいが現われたとたん、

14

モーロらが陸地からもどってきた、
入港を乞う詔書をたずさえて、
提督の送った使者らも共に、
王から誠意ある扱いをうけて。
かくしてポルトガル人はべつに
なんの危険もないようではあり、
キリシタンもいるとわかった上は、
汐入川に入港しようと決意した。

15

かれのつかわした者らは言上した、
かの地では聖壇と聖職者を見た、
あちらで宿を供せられ、よく眠った、
夜のとばりが光をかくしている間に。
また王にも人々にも満足と
悦びのほかは感じられなかった。
あんなに明るく完全なしるしには
うたがいなど抱く余地もなかったと。

16

このことばに高貴なガマはにこやかに、
乗船してきたモーロラを迎えた。
なぜなら人物ともなればそのように
たしかと見えるしるしは信じるので。
不実な人間は船を充たした、
のってきた小舟は舷側かたがはにつけて、
みなほくそえみつつやってきた、なぜなら
獲物を圧さえたものと信じたから。

17

かれらは陸地に用心ぶかくも
兵器弾薬を準備しつつあった。
船団が河に投錨したと見るや
だいたんにも襲いかかろうためである。
こうした裏切りでルーソの奴ばら
みなごろしにしてくれようとたくらんだ。
こんなぐあいには、モサンピクではたらいた
悪業の酬いを思い知らせようと。

18

水夫らは例の掛け声をあげながら
がんじょうな錨をまきあげている。
へさきの帆だけを風にあてがい
深木みおきおく港口さしてすすむ。
だがかねて音にきこえた国民を
見守ってきたエリュクス的美紳は
かくれた大きなわなを見てとるや
征矢せいさながら天から海へと飛んでくる。

19

白いネレイスたちを呼びあつめた、
そのほかの海の仲間をもことごとく。
じしんが汐路の生まれゆえに
波の精らもいうことをきくのだ。
そこで降臨のいわれを語ってきかせ、
一行を率いて出かけたのであった、
艦隊がおたぶつしてしまう場所に
つくの妨げてくれようとして。

20

かれらは水面をばく進している、
銀いろの尾で白泡をたてながら。
クロトは胸で海水を切っている、
つねにもましてあらあらしく。
ニセがはねる、ネリーネがとびあがる、
力いっぱい、ちぢむ波頭よりたかく。
うねる波はせきついたネレイスたちに
恐れをなして道をあける。

21

ひとりのトリトンの肩にのり、顔を
まっかにした美しいディオネがゆく。
背負うものは優しい荷を苦しめない、
美しい重荷で得意なのだから。
かれらはもう激しい風が艦隊の
帆をふくらませている処についた。
散開して即座にとりかこんだ、
つき進みつつある快速の船を。

22

女神がネレイスたちといっしょに
旗艦のまんまえに立ちほだかり、
港口をさえぎってしまったので、
風が帆をふくらませても吹き損だ。
やわ肌をかたい竜骨におしつけ
大船をあとずさりさせてしまった。
めぐりにいたものは船をひっぱり
敵の港口からのがれさせた。

23

あたかも用心ぶかい蟻たちが
大きな荷物をたくみに背負って
穴へと運び入れ、凍てつく冬の
大敵に雄々しくも抗らうように、
— そこにかれらの労役・辛苦がある。
— そこにまさかの力を発揮する。
そのようにニンフたちはポルトガル人から
不吉の終局をふせぎつつあった。

24

船はしかたなく後ろむきになった、
水夫らが声はげまして帆をあやつった
にもかかわらず、みないきりたっている、
舵を右に左にと取りながら。
老練な水夫長は前方に
船を打ち砕いてくれんばかりに
海礁がひとつ立ちほだかるのを見て
船尾から叫んだがむだであった。

25

働いている荒くれ水夫の
あいだから恐ろしい叫びがあがる。
大音響がモーロらをおびやかす、
さながら激戦でも見たかのように。
そうした狂乱のいわれがわからぬ。
窮地にだれが頼れるかがわからぬ。
さては計画が人に知られて
そのため罰をくらうのではないか。

26

見よ、たずさえてきた軽舟へと
とっさにとび移ったものがある。
海中にとびこみ、泳いで逃げて
波がしらをあげてゆくものがある。
右からも左からもとびこんだ。
ひとのさまを見ておじけづいたのだ。
敵の手におちるよりは海中に
身をおどらすほうを選んだのだ。

27

あたかも林間の池のかわずが、
つまりいにしえのリュシアの民だが、
うかつにも陸にあがっていたところ、
たまたま人のけはいを感じて、
気づいた危険のをがれようとして、
あちこちからとびこみ——水の音——
あんなに知った隠れ場にかくれて
頭だけを水面に見せている。

28

そのようにモーロらは逃げる、そして
船を危険にみちびいた按針も
計略がばれたものと早倉点し
しおからい水にとび込んで逃げる。
しかし、不動の巖につきあたって
貴いのちを失わぬようと
旗艦はただちに錨を投げる。
他の僚艦もきそって帆をおろす。

29

用心ぶかいガマは思いがけない
モーロらの挙動と、あわせて按針の
あわてふためいた遁走を見るや、
粗暴なてあいのたくらみを悟った。
そして、風が逆でも強くもなく、
潮流が早いわけでもないのに、
船が進みえないのを見てとるや、
これを奇跡とおもってこう言った：

30

—「おお、ふしぎ千万大な事件よ、
おお、明々白々の奇跡よ、
おお、思いもかけずばれた謀略よ、
おお、不実邪悪な、いつわりの民よ、
だれがこのたくまれた禍いから
賢くも難なくのがれようぞ、
もし天にまします守護の女神が
よわい人力を助けないならば？

31

「神の攝理はよくぞわれわれに
この港の危険を示された。
われわれはよくぞ見た、外見の
信頼があやまりであったことを。
しかし人間の知恵も用心も
たくみな計略にかなわぬ上は、
おお、守護の女神よ、庇護したまえ、
あなたなしには護られぬものを。

3 2

「もしこのみじめな異郷の民への
憐れみがあなたをつよく動かして
あなたのこよなき好意をもってのみ
邪悪な民からお救い下さるなら、
どこぞ安全な港にわれわれを
すぐさまご案内くださりたい。
ないし、さがす土地をお示し下さい。
あなたのためにこそ船出するのですから。」

3 3

こうした憐れげなことばをきいて
美しいディオネは心うごき
ニフの仲間から立ち去ったが、
この突然の別れは惜しまれた。
やがてきら星のあいだに入り、
第三天で歓迎されつつ
前進をつづけ、父神のいます
第六天へと走っていった。

3 4

走っているうちに体^{からだ}がほてって
面輪^{おもて}が美しくなりまかったので
星くずも空もあたりの空気も
すべて女神を恋してしまった。
息子のやどる両のまなこからは
精気がいきいきとほとぼした。
それは凍てつく両極をももやし
火の半球をも凍らしてしまった。

3 5

そしてこれまで可愛がられてきた
父神をなおおとろかそうとて、
あるときイダの森でトロヤ人に
現われた姿で身をあらわした。
水浴びするディアナを見て人体を
なくした狩人が女神を見たにせよ
獵犬にかまれはしなかつたろう、
とうに情欲に殺されていたろうから。

3 6

金色のちぢれ毛が、雪をあざむく
女神のうなじに乱れていた。
歩むとき、眼に見えぬアモールの
もてあそぶ白い乳房がおののいた。
しろい胸から焔がほとぼした。
そこは童子が心をやくところ。
すべこい柱を情欲が這っていた、
さながらきづたが捲きつくように。

3 7

女神は恥じらいが自然の守りである
かくしどころを薄布^{うすなぬ}でおおているが、
この布は紅ユリを物惜しみせず、
かくしきりもせず露わにもしないのだ。
かえって情欲をたきつけようとて
そのまえに見慣れぬ物をおいている。
天上ではもうあちこちで見られる、
ウルカーヌスに嫉妬が、マルスに愛欲が。

3 8

それから天使のようなかんばせに
笑みをまじえた憂いを見せながら、
恋遊びでそこつな愛人から
ひどく扱われた婦人のように、
同時に嘆いてそして笑って、
はしゃいで悲しむ婦人のように、
またなき女神は憂い顔よりは
愛くるしげに父神にいった：

3 9

「わたしいつも思ったことよ、おえらいお父
さま、
わたしの大好きなことにたいしては
あなたはやさしくして下さったわね、
たとい反対者にはつらくあたろうと。
それなのにわたしのことをご立腹、
お叱りをこうむるいわれもないのに、
バッカスのいうなりになさるがいいわ。
どうせわたしは不仕合せな女ですもの。」

40

「このわたしの大切な民のために
涙を流すのですのにむだですわね。
愛してかえってあだになる、だってあなたは
わたしの願いをほごになさるのですもの。
かれらをかばってわたしは泣きさけぶ。
けっきょくわが身の運命とたたかうのだわ。
愛すればこそいじめられるのだから、
呪ってやるわ。定めし目をかけてもらえるで
しょうよ。

41

「あげくは蛮人の手にかかるがいいわ、
だってわたし・・・」といいかけ、感きわま
って
地^も面があつい涙でぬれてしまった。
咲きそめたバラに露のおりた風情。
しばし口をつぐんだが、歯の間に
憐れげな言葉がはさまったかのよう。
つつけて話します。すると前にのり出して
偉大なはた神が女神をさえぎる。

42

猛虎の胸をも動かしたであろう
この甘えぶりにこころ動かされたかれは
くらい大気をも清明にしてしまう
にこやかな顔を高御空から見せて
涙をぬぐってやり、全身火と化しつつ
頬に口づけし、うなじを抱きかかえた。
もしふたりだけであったなら、そのことから
クビドがもうひとり生まれたことだろう。

43

まな娘の顔にじぶんのをすりつけると
相手はすすり泣きと涙をますばかり。
そのさまは、乳母に叱られたみどり児が
あやされるとなお泣きじゃくのに似ている。
かれは娘の怒りをなだめようとて
未来の事件をあこれ語ってきかす。
運命の秘密をあからさまにしつつ
とうとうこんなふうに言いだすのであった。

44

—「美しい娘よ、心配せんでよい、
おまえのルシタノにはべつに危険はない。
またおまえの泣きぬれた眼にもまして
わしに力をふるうものもないのだ。
娘よ、約束するが、おまえは見るのだ、
ギリシャ人もローマ人も忘れ去られるのを、
この民が東洋の国々において
おこなう華々しい事業によって。

45

「よし能弁のウリセスがオギュギア島で
終身奴隷となるのを免れたにせよ、
またよしアンテノールがイリュリア湾や
ティマウス川の源に分け入ったにせよ、
またよしけいけんアイネアスがスキラと
カリュブディスとの難所を渡ったにせよ、
おまえの民はさらに大事業をくわだて
世に新世界を示すことになるだろう。

46

「要塞、都市、たかい城壁をかれらが
きづくのを、娘よ、おまえは見るだろう。
残虐で戦い好きなトルコ人が
連敗するのをおまえは見るだろう。
放逸で自信にみちたインドの諸侯が
力づよい王に屈服するのを見るだろう。
そして全土を平定しおおせたかれらは
よりよき掟をその地に与えるだろう。

47

「おまえは見るだろう、かれがいま苦勞して
危険をおかし、インダスを探しにゆけば、
おびえたネプトゥーヌスはかれをおそれ
風もないのに波頭をあげるのを。
屈いていながら海原が沸きたつとは
前代未聞の奇跡ではなからうか。
地水火風すら恐れをいたくとは
なんと気宇壮大な民であろうぞ。

48

「おまえは見るだろう、水を拒んだ土地も
いずれ良港となるにちがいないことを、
泰西から船出してくる船が
ながの旅路をやすめに寄るような。
さいごに、いま致死の計略をたくむ
この沿岸地方もすべて帰順して
かれらに貢をするだろう、恐ろしの
ルーズには抵抗できぬと覚悟して。

49

「おまえは見るだろう、なだかい紅海も
おそれ恥じ入って黄色くなるのを。
おまえは見るだろう、ホルムズの強国が
二度も占領され平定されるのを。
そこで見るだろう、狂暴なモーロが
おのれの放った矢に射抜かれるのを、
おまえの民に刃向うものは、とど
おのれと戦うことを思い知るべく。

50

「おまえは見るだろう、堅忍不拔のディウが
二度も囲まれながら落城しないのを。
そこでみぞうの軍功をなしとげて
かれらの武勇と武運を示すだろう。
おまえは見るだろう、偉大なマルスが
ルシタノの豪勇をうらやむのを。
かれらは見るだろう、モーロのいまわの聲が
マホメットの偽りをひぼうするのを。

51

「おまえは見るだろう、モーロからゴアが奪
われ、
そこがのちのち東洋といったの
主となり、そして勝ちほこる民の
勝利をもって尊崇されるのを。
そこで意気あがるゴアは居丈高に
偶像をあがめる異教徒にたいし
きびしい械かせをはめるだろう、またおよそ
おまえの民に戦いをいどむ国に。

52

「おまえは見るだろう、カナノルの要塞が
わずかの手兵によって支えられるのを。
また見るだろう、カリカットが破壊されるの
を、
あの人馬絡繹らくえきの繁華なみやこが。
また見るだろう、コーチンではその勝利を
堅琴が歌ったためしのないほどの
大胆不敵の勇者が名をなすのを、
不朽の名声と栄光に値するのに。

53

「レウカテ岬の海も艦列をもって
沸きたちはしなかった、かのアウグストゥス
が、
アクティウム沖の会戦で勇敢にも
不正なローマ提督を負かしたときに、
かれはしののめの、また名だかいナイルの
また猛きスキタイのバクトラの民から
勝利と戦利品をあまたもたらしたが、
エジプトの不貞の美女のとりことなった、

54

「おまえがおまえの民の砲火によって
海が沸きたつを見るであろうほどには、
偶像教徒を負かし、モーロを捕えて、
さまざまの国を打ちしたがえつつ。
またゆたかな黄金半島を平らげ、
はるけきシナにまでおよび、そしてさらに
東洋のいや果ての島にまで渡り、
全海洋が帰順するにちがいない。

55

「このように、娘よ、かれらはじんみらい
これに越す胆力は見られようもない
人力いじょうの勇氣を示すだろう、
ガンジスの海からガデスの海にまで、
また北洋の海から、かの侮辱された
ルシタノの示した海峡に至るまで、
よしんば全世界の先人たちが
顔をつぶされたとして、蘇生したにせよ。」

56

こういいおえるや、かれはマヤの聖なる
息子を地上に送った、艦隊が
危険なしに碇泊することのできる
安全な港を確保するようにと。
またモンバサで、勇敢な提督が
冒険して時を空費せぬようにと、
夢枕に立って、しづかに慰うべき
陸地を教えてやれとかれに命じた。

57

すでにキュレネウスは虚空を飛んでいた。
足に翼をつけて大地におりたつ。
手に宿命の細棒をもっていた、
それでもって疲れた眼をねむらすのだ、
それでもって悲しいみ魂^{たま}を黄泉から
呼びもどすのだ。風もかれにしたがった。
こうべにはかぶりつけのヘルメットを、
こんないでたちでメリンデに着いたのだ。

58

みちづれには「名声」を、それはルシタノの
けうのいさおしを告げさせるためだ。
それは名だたる名を愛情にむすび
それをもつものを敬愛せしめるからだ。
こうして当地の親切な人々に
あまねき評判をしたしいものにする。
もうメリンデをあげて湧きたっている、
強い民の態度・風習を見ようとて。

59

かれはさっそくモンバサさして発つ。
船が寄港をおそれていたところだ。
敵の港口や奇怪な土地から
人々に立ち去れと命ずるためだ。
なぜなら極悪非道のたくらみには
勇気も機略も歯が立たぬからだ。
阻力もわる知恵も細心も歯が立たぬ、
もし天から神意が到らぬならば。

60

夜は行程のなかばを歩いていた。
空の星は借りものの光をもって
ひろい世界をくまなく照らしていた。
人々はただ眠って休養していた。
名にし負う提督は不安の夜を
あかすのに疲れていたが、そのとき
眼にみじかい休息を与えていた。
他のものはたがいに見張りについていた。

61

折りしもメルクリウスがガマの夢路に
現われていう：「遁れよ、ルシタノ、
おまえを破滅へと逐いやろうとて
織りなす邪悪な王の計略から、
遁れよ、風も天もおまえの味方だ。
天候も大洋も清朗だし、
よそへゆけばもっと親切な王がおり、
安全に宿営することができる。

62

「おまえはここではけっして持ちほせぬ、
泊めた人々を馬の常食にする
あの残忍なディオメデスの供した
たくみにたくんだ宿よりほかにほ。
おまえは哀れな客をぎせいにした
悪名たかきブジリスの祭壇を
かならず持つだろう、期待がすぎれば。
遁れよ、不実・狂暴なてあいから。

63

「海岸に沿って走れ、そうすれば
もっと誠実な土地を見出すだろう。
その界限では燃える太陽が
昼と夜とを等分にしている。
そこである王がおまえの船団を
よろこび迎え、贈り物をさわに添え、
安全な宿を供してくれよう、
インドへのかしこい案内人をも。」

64

メルクリウスはこういって、提督から眠りを奪った。かれはいたくおどろき、眼をさまし、くらい闇が突如として聖い光に傷けられるのを見た。そして敵地に長居をしないことがいかにばかり大切だかを見てとるや勇気をとりのおし、水夫長に命じ、吹きくる風にむけて帆を張らせた。

65

「帆を張れ」といった、「帆を張れ順風に。天が加勢し、神が命ぜられるのだ。わしはかがやく居居の使いを見た、かれはわれらの旅路を護ってくれる。」この声に、船乗りたちの活動がはじまった、右舷からも左舷からも。かれらは掛け声かけて錨を上げる、おどろくべき奮力を発揮しながら。

66

かれらが錨を上げている時しも夜陰にまぎれていたモーロどもはひそかに繫留索を断ち切っていた、岸にぶつけて破壊させてくれようと。しかし用心ぶかいポルトガル人は山猫の眼をもって監視していた。モーロどもは気付かれたと知って漕ぐはおろか、飛ぶがごとくに逃げ去った。

67

しかしながらすでに鋭いへさは銀色の湿った道を切っていた。頬をなぶるそよ風が吹いてくる、規則正しいやさしい動きをもって。かれらは過ぎた危険を話し合った。なぜならあれほどの状況において九死に一生を得た大事件がたやすく忘れ去られようもないからだ。

68

燃える陽が一回転をまっとうし、つぎの回転を始めたとき、かれらははるかに船を二艘みとめた、それらはそよ風をうけてしずかに走っていた。てっきりマウロらに相違なしとみてそのほうへ近づこうとて帆をかえず。一隻が、椿事しよつたいの出来をおそれて乗組みを救おうと岸へ取ってかえず。

69

それほど機敏でないもう一隻はルシタノの手におちる羽目とはなつた、気性のほげしいマルスの勇もなくウルカーヌスのすごい威力もないので。なぜならば小人数の胆っ玉はちいさくて臆病であつたらうから、刃向かわなかつた、よし刃向つたにせよさらに余計の損傷を受けたらう。

70

ガマはその探し求めるインドへの按針を熱望していたのだから、モーロらのうちに得られると考えた。しかし考えどおりにはいかなかつた。インドが天下のどのへんにあるかをたれひとり教えられなかつたからだ。ただし口をそろえて、メリンデはちかく、そこによい按針が見出せるといった。

71

モーロらはほめる、その王の善意を、寛厚なさがを、誠実なものごしを、応揚を、そして人情に富むことを、もっとも尊敬すべき人物として。提督はそれをまことであるとみた。なぜならすでにそのようにキュレネウスが夢枕で告げておつたから、そして夢とモーロの告げた所へおもむいた。

72

うきうきするところで、フォイボスの光は
 エウローバの略奪者をおとずれて
 その両角^{つの}を熱しており、フローラは
 アマルティアのそれを撒きちらしていた。
 天のまわすせわしげな日輪は
 その日の憶い出をよみがえらせていた。
 よろずを続べたもうお方があるほどの
 被造物にしるしを押された日なのだ。

73

折しも船団はメリンデ王国の
 すでに望まれる場所に着いていた。
 テントで飾り、聖き日を祝うのを
 示すかのようにいかに嬉しげだ。
 旗ははためき、幟^{のぼ}はのぼっている。
 鞞の色がはるかに現われている。
 大太鼓や小太鼓を打っている。
 こうして堂々と入港していった。

74

メリンデの浜辺はどこもあふれている、
 艦隊の威容を見にきた人々で。
 それは出遣ってきたこの民よりも
 誠実で情味のある民であった。
 その前にルシタノの艦隊がとまり
 おもい錨を海底に投げこんだ。
 捕えていたモーロのひとり遣わし、
 かれらの来着を王に報せしめた。

75

ポルトガル人をかくも偉大にする
 心意気をすでに知っていた王は
 その港が選ばれたのを悦んだ、
 勇士たちこそそれに値するだけに。
 そして誠意と清浄無垢の心で、
 それこそ寛厚な胸の現われだが、
 使者を通じ、さっそく上陸なされ
 わが国土を利用されたいと乞うた。

76

それはまごころこめた贈り物であり、
 二枚舌ならぬまことの言葉であった、
 かくも多くの海陸をわたってきた
 高貴な勇士らに王が取らずものは。
 そのほかまた王は贈った、緬羊や
 それからまるまる肥えためんどりなど、
 そのときの季節の果実をも添えて
 そして好意は品物にまさっていた。

77

提督はよろこばしげに迎える、
 ありがたい使者とその伝言とを、
 そしてすぐさま王に礼をかえす、
 それははるばる用意してきた品だ。
 かぞえあげれば、もえる鞞の羽二重、
 みごとな高価な枝しげきさんご、
 これは海の底ではやわらかいが、
 外に出すと硬くなるのであった。

78

なおひとり弁のたつものを遣わし、
 王と修好条約をむすばしめ、
 かつ、ただいまは下船できぬことの
 容赦を辞を低うして乞わしめた。
 そこで有能な使節は出発し、
 パラスから伝授された口上を
 こうした言葉で切りだすのであった：

79

—「至高の王よ、清らかなオリュポスの
 最高の法廷が、あなたをおそれ
 かつ愛する誇りたかい国民を
 治めることをあなたに委ねたが、
 安全無比の港としてあまねく
 東洋に知れわたるあなたをたずねて
 われわれは参りました。ほかでもない
 たしかな救いが得られるものと期待して。

80

「われらは海賊ではない、防備を欠く

弱小の町々を通りすぎては
鉄や火をもって住民をころし
財宝をかすめ取ったりするような。
いや、雄大なヨーロッパを船出して
富める大インドのとおい国々を
探しにゆくのだ、われらのあがめる
至尊の命をおそれかしこんで。

8 1

「なんとという非情な民もいることか、
なんとやばんな慣わし、みにくい風俗、
ただに港々をとぎすのみならず、
ひとけなき砂地での宿さえ拒むとは、
われらの腹がくろいとも思うのか、
これほどの小人数をおそれるとは、
いつわりのわなをあれこれ仕掛けて
われらを絶滅しようと計るとは、

8 2

「しかしあなたにはいっそうの誠心^{まごころ}が
みられると確信します、仁慈の王よ、
そして難破のイタカ人がアルキノオスから
受けた助けをあなたに期待するのです。
そのあなたの港にぶじ着きました、
神意を伝える者にみちびかれつつ。
あなたへと差し向けられた以上、あなたが
誠実で情に厚いことはたしかです。

8 3

「思いなざるな、王よ、われらの榮えある
提督があなたに敬意を表すべく
下船しないのは、べつにあなたの誠意を
疑ってかかるためであるなどとは。
じつは王命をはたすだけなのです。
つまり船団をすてて、いかなる港、
いかなる浜にもものぼるべからずという
王の厳命にしたがうだけなのです。

8 4

そもそも臣下の務めは、こうべにしたがう
手足のいたすそれですから、あなたも

王の役をもたれる以上、たれひとり
王に叛くことは望まれますまい。
しかしまああなたに見られる恩恵と
大きな好意を、提督とその部下は
かならず認めることを約束します、
すべての川が海に注ぎ入るかぎりは。」

8 5

こう語るのであった、列座のものは
語りあいながら、かほどにも多くの
空と海とを越えてきた人々の
胆の太さをちちに賞めたたえた。
そして名だたる王は、ポルトガル人の
従順な心を胸にえがきつつ
かくも速くあって心服される
王のみいつを又なきものにおもった。

8 6

そして笑顔とうれしげなようすとで
敬意を表しつつ使節に答える：
——「わるい疑念はすべてお退け下さい。
つめたい怖れなど抱かれぬように、
あなた方の豪毅ぶりと事績とは
あまねく世の重んずるところですから。
あなた方を虐待した連中は
みごとな心底だとは申されませぬ。

8 7

初穂献上のおきてをまもるため
ぜん乗組員が上陸しないことは
わたしには異様なことに思えますが、
恭順であることは見上げたことです。
しかしもし王命が許さぬとあらば
わたしとも同意しないことでしょう、
かくもの忠誠がただただわたしの
わがままのために破られることには。

8 8

もっとも翌くる日の光がこの世に
とどいたときには、軽舟に乗じて
艦隊を訪問にでかけるでしょう。

ながねん拝観をのぞんでいたのです。
もしまだ激浪のため、強風のため、
長道中のため破損しているなら、
ここで気軽に按針も食糧も、
さては修理器具なり得られるでしょう。』

89

このように語った。ラトナの息子は
水中にかくれつつあった。そして使者は
伝言をもっていそいそと船団へ
たっていった、かれの小舟に乗って。
だれの胸も悦びに充ちている、
探し求めていた陸地発見の
正身正銘の方策をえたとして。
そしてよろこび勇んで夜を祝った。

90

そこには花火までも欠けてはいない、
それはまばたく彗星を模している。
砲手らはおのがじし役目をはたす、
天を、地を、水面をゆるがせながら。
砲弾に火が放たれるありさまは
キュクロベスの仕業ともいうところか。
他のものは天をつんざく声をあげ
ひびきのたかい楽器を鳴らしていた。

91

これにたいして地上からもこたえる、
うなりをあげてまわる火箭かきんをもって
やけた輪が回転しつつ宙を切る。
筒のなかの爆薬がさくれつする。
群集の叫びが冲天にとどく。
海はまるで火を放ったかのような。
陸上もそれに劣らぬ。このように
双方で試合よろしく祝われた。

92

だがすでに天は倦まず回転して
人々に勤めをうながしていた。
メムノンの母は光をたずさえて
ながい眠りに歯止めをおいていた。

闇はおもむろに消え去って、大地の
花の上につめたい露と化していた。
おりしもメリンデ王は停泊中の
船団を訪ねに舟に乗っていた。

93

浜辺のあたりが湧きたつのが見える、
うれしげに馳せつける群集のため、
妙えなる緋のカバヤが輝いている。
絹織物の布地が光っている。
実戦用のアザガイアのかわりに、
月の弦をかたどる弓のかわりに
ヤシの小枝をかざしているが、これは
勝利者のまことの冠なのだ。

94

長くて幅ひろの小舟が、それには
色さまざまの絹が張られてあるが、
メリンデ王をのせている、かたわらに
はんべるのは廷臣らや貴族たち。
みな豪華な服を着用している、
かれらの位階やたしなみにしたがって。
頭には黄金の飾りをつけた
絹や木綿のターバンをまいている。

95

高価などんすのカバヤ、その色は
かれらの珍重するえびちゃ色だ。
うなじには、材よりも細工にまさる
精巧な黄金のくびかざりが
金剛のかがやきに光っている。
腰には手のこんだ豪華な短剣。
さいごに、はき物にはピロードの地に
金と小粒真珠がかぶせてある。

96

絹製の高くてまらい天蓋の
こんじきの高い柄に嵌められたのを
ひとりのずき従者もって至高の王を
太陽にやかれぬようかばっている。
へさきでは異様でゆかいな音楽が

きくも恐ろしげな音をたてている、
弓なりにまるく曲がったラッパから、
それは調和せず荒っぽくひびく。

97

それにおとらず着飾ったルシタノは
船団からはしけへと乗り移った、
メリンデ王を海に迎えるために、
高位頭官の供人らをつれて。
ガマのいでたちはイスパニア風だが、
まとう衣服はフランス製であった。
布地はヴェネチアわたりのシユスであり、
色はひとのたつとぶ^{えんじ}臙脂であった。

98

袖口はきんのボタンで留められてあり、
それに陽があたると眼が見えなくなる。
軍用ズボン^{ズボン}は運命の女神の
惜しむ貴金属でししゅうしてあった。
おなじ材料の精巧なホックが
胴着の合わせ目をきっちり締めている。
黄金のつるぎはイタリア様式。
軍帽の羽飾りはわずか垂れている。

99

かれの供人らの装いのうちに
妙えなる骨貝からとれる染料の
とりどりの色が、人目をよろこばず、
さまざまの衣裳もまたそのとおり
そうした衣服から出る美しい
輝きをいちどきに眺めてみると、
さながらタウマスの娘のうるわしい
ニンフのきらめく弓のように見える。

100

りゅうりょうたるラッパがひびきわたって
みなびとの気をかきたてるのであった。
モーロの小舟は海をふさいでいた、
日覆いで水面をひきずりながら。
耳をつんざく大砲がうなっていた、
けむりの雲で陽をさえぎりながら。

火砲のとどろきがくり返されると
モーロらは手をもって耳をおさえる。

101

王は提督の舟に乗り移って
すでに提督を抱擁していた。
ガマは(王の身にとって)ふさわしい
いんぎんをつくしてかれに話しかけた。
モーロ王はおどろきと賞讃とを
あらわにしてかれの容姿と挙措をみた、
はるばるインドへとわたる人々に
おおきな尊敬をはらう人として。

102

そしてていちょうな言葉で申しでる、
領内で用がたりればなんなりと、
もしまだ食料でも不足のときは
わがもの同様なんなり乞われない、と。
なおいった、ルシタノの民は名声で
よく知っている、見るのは初めてだが。
じつはうわさで聞いている、他の土地で
わが掟の民とたたかったよしを。

103

そして全アフリカにとどろいている、
といった、かれらのなしとげた偉大な軍功は、
かのヘスベリデスの住んでいた国の
王冠をかれらがかちえたときに。
そして口をきわめて賞めたたえる、
ルソの民のささいなてがらをも、
名声で知った最大のてがらをも。
しかしガマはこんなふう^{ふう}に答えた：

104

—「おお、仁慈な王よ、かくも多くの
艱難と波瀾をおかして海洋の
すさまじさをけみしたルシタノの民に
ただひとり同情されるあなたよ、
天を回転し人類を治める
あの高きに在ますとこしえの者が
われらの大恩をこうむるあなたに

身代りにお酬いくださるようによ

105

アポロのやく民のうちであなたのみが
われらを深海から迎えてくださる。
あなたこそエウロスの風伯からの
安心のいくところよい避難所です。
広大な天が星くずをやしない、
日輪が世に光をあたえるかぎり。
どこにおろうとあなたの賞讃は
光栄の至りと記憶するでしょう。」

106

いいおえるや、小舟らは漕ぎすすむ、
モーロ王の見たがる船団へと。
大船をつぎまたつぎと見てまわる、
どれをも王が視察できるようにと。
ウルカーヌスは天にむかって打ち、
船団は祝砲で王をことほぎ、
りゅうりょうたるラッパを吹き鳴らせば、
モーロらはアナフィルをもってこたえた。

107

おおようなモーロによっていっさいが
視察されたのち、そのかれはという
見るからにかくも恐ろしい見知らぬ
道具のごうおんをきいて驚嘆し、
じぶんらを乗せた小舟が水上に
とどまり投錨するよりに命じた、
勇敢なガマとかれらの見聞きした
ことどもについて語りあうために。

108

モーロはあれこれ会話をかさねつつ
質問するのを楽しんだ、あるいは
かのマホメットをあがめる民となした
天下にかくれなき戦いについて、
あるいはかれの住まういやはての国
ヘスペリアの国民について尋ね、
あるいは隣国の人々について、
あるいは越えた湿った道について。

109

—「しかしともあれ、勇敢な提督よ、
語られよ（と王はいった）、さっそくに、
お国の気候のことを、あなた方の
土地の宗教のことなど、詳細に。
おなじくあなた方のふるき由緒を、
また強大な王国のはじまりを、
建国いらいの戦いの模様を、
華々しさは聞き知ってはいます。」

110

「そしてまた語られよ、怒った海が
もたらした長い航海についても、
われら未開のアフリカがつくりだした
異様やばんな仕来りを見てきつつ。
語られよ、いま金のくつわをはめて
朝日をちりばめた馬車をひく馬が
冷たいアウローラから出てきます。
風はねむり、波もやすんでいます。」

111

「お話をしたしく聞きたい願いは
時とともにつのるばかりのようです。
なぜなら、聞き知らぬものがありましようか、
ポルトガル人のたくいまれな事績を？
明るい陽はわれらからそんなに遠く
照りませぬ、メリンデ人は大業を
たかく買えないほどに無知蒙昧な
人間だと判断されるほどには。」

112

「ごうまんな巨人らは明るく澄んだ
オリュンポスにあだな戦いをいどみ、
ペリトゥースとテセウスは、めくら蛇に、
くらいブルトンの国を改めました。
世にそれほどの事業があったにせよ、
ネレウスの怒りにさからうことは
天国・地獄にいどむのにもまして
榮譽とすべき難事業なのです。」

〔47ページに続く〕

と親しくなれる次第で、この点は以前のサラマンカの経験と少々異り、留学当初の精神的孤独と知的会話の欠如は未だにありありと思い出され、現在の多数の友人知己との友好関係を感謝している次第である。

人々はすごく音楽の才にたけており、建設労働者が二重唱をしながら働いているあたり、音楽が生活にとけこんでいる感じで、大学生も歌えば必ず二重唱になる。

日曜日には一切が休みで、店をのぞくたのしみもないのであるが、大学の帰途にブラリと古い町をそぞろ歩きし、民芸風の table center や皮製品、さては昔の羊銅のベルトとか羊につけた鈴など拾い買いする楽しさは格別、いづれ運送中に割れると知りつつも九谷焼に似た Valencia の動物画の焼物をながめ、乏しい財布をはたく楽しさ。

最後になって申し訳ないわけであるが、当大学のロマンス研究の一端にたづさわる者としてその方法論を少々紹介しなければならないかと思う。スペインでは高等学校ですでに文科系と理数科系に分れ、前者にはラテン語ギリシャ語アラビア語中から二語をとることが必須で大抵は前二者を充分勉強させられる。フランスと同様に国家試験にパスすると bachelierato の資格が得られ、好きな大学に学べるわけで、そこで 1, 2 年生の間に再び古典語の勉強をたたきこまれるのでラテン語については豊かな実力をもっている。Latin vulgar まで学ばされ、更に Menendez Pidal の言語学を 3 年生で徹底的にやり、4 年生では言語演習で古叙事誌 Cantar de mio Cid をよみ、語源から latin vulgar さらに castellano への音韻変化を日々論じて行くやり方で、5 年生では同じやり方で方言学、ダンテの神曲、フランス文学の解釈など実に多量に早くやらされる。徹底的暗記と応用（ラテン語にもとづいて）を要求され、大半は家での勉強で実力のうらづけがなされる（しばしば試験が行われ、家での勉強の程度がたしかめられる）。Estudios románicos については大学を出るときにすでに立派な専門家になっているわけで一般のレベルは非常に高い。日々きびしい勉強がつづくので、この点日本の大学生達はスペインへ来れば大分戸惑い血のにじむ思いをさせられる。したがって外人コースのみで終る人が大半である。英語には一般に弱い傾向がみられるが、先生は最近の北米における言語学の発達を度々講義中で紹介するので、夜の外国語コースで英語をとる学生がふえている現状である。

スペインの文化とくに文学はラテン文学の基礎の上に立っているのでラテン語の知識なくして何が出来ようか？ というのが当地のロマンス研究の基本的態度である。

とりとめもない紹介になってしまったが、いくらかでも参考になれば幸甚であり、今後のロマンス語研究の発展をのぞむ次第である。

~~~~~  
〔45 ページより続く〕

113

「かのヘロストラトスは世の人々に  
その名を喧伝されたばかりに  
名工クテシフォニオス造営の  
ディアナの宮居を焼きはらいました。

もしまた揚名の欲望がわれらを  
そうした仕業であざむくとしても、  
不朽のしごとを企てる人士は  
久遠の栄光をのぞむべきでしょう。」